# 家康

徳川家康 5

颱風の巻
心火の巻

山岡荘

# 徳川家康

颶風の巻・心火の巻

山岡荘八

講談社

KODANSHA

徳川家康　第五巻　颶風の巻　心火の巻
昭和三十九年十一月十五日第五刷発行
著者　山岡荘八　発行者　野間省一
印刷所　豊国印刷株式会社　製本所　和田製本工業株式会社
発行所　株式会社講談社　東京都文京区音羽町三ノ一九
振替　東京　三九三〇　電話　東京（九四二）一一一一（大代表）
©山岡荘八　一九六三
定価　六百二十円

# 徳川家康 5

颶風の巻
心火の巻

## 目次


颶風の巻

緒　戦　七

親鬼子鬼　二八

決戦前夜　四四

智略戦略　六〇

決　戦　七三

再び雌伏　八三

冬のあやめ　九四

入道雲　一一四
落雷　一二五
鞭の足音　一三八
追放　一五四
泣き獅子　一六五
落日の影　一七六
後の月　一八七
甲斐の風　二〇二
三河の意地　二一四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

落花有情　二二九
滅亡の歌　二四四
心火の巻
離　間　二六一
大地の塩　二七六
水嵩まさる　二八八
前夜の宴　二九九
本能寺　三一一
地上の睡蓮　三二六

落日前後　三三七
伊賀の龍巻　三六〇
付　録（参考地図及び諸家系譜）

装幀　稲垣行一郎
挿画　木下二介
箱裂地　麻地草花人家文様茶屋染
提供　山口勉
表紙金版　徳川家康直筆署名

# 徳川家康

## 5

颶風の巻

心火の巻

# 颶風の巻

## 緒戦

### 一

甲府の春はまだ浅かった。

四周の連山は山ひだに消えやらぬ雪を光らせ、庭はいっぱいの霜柱であった。

その霜柱をふんで、勝頼は城の内外に結集した軍兵を見てまわった。

人も馬も、彼の目には逸りきった頼母しいものに見えた。

勝頼はひとまわり城内を歩いて奥庭から居間に近づきながら、うしろに従っている板坂卜斎をかえりみた。

「わしはこんどの出陣が、これほど幸先よいものになろうとは思っていなかった」

「みな、ご隆運の印でございましょう」

父の法印とともに信玄のお伽衆をつとめて来た侍医の卜斎は、うやうやしく笑った。

「正直に言うとな、わしは家康めが長篠城へわれを裏切った奥平九八郎を入れたと聞き、これを捨てておけぬと思うたのじゃ」

「ご尤もに存じまする」

「ところで今では当初の考えとはがらりと思案の規模が変って参った」

勝頼は楽しそうに朝の陽を仰ぎながら、端麗な横顔に夢を追う者の恍惚さをにじませて、

「淡路の由良に遁れてあった足利義昭公から急遽上京あるように……そう言って来られるまでは、わしがただ家康めを……と、事を小さく考えていたのだ」

「それが、大事なご上洛戦に変りました」

「おお、お父上が生涯の希いであったご上洛の戦にのう」

「たぶんご尊霊も地下でおよろこびでございましょう」

「そうであろうとも。将軍義昭公は、家康はじめ、家康の母が生家、刈谷の城主水野信元のもとへも、越後の上杉へ

も檄を飛ばしたそうな。早く勝頼と和睦して西上し、信長の専横をこらして天下の再興を計るようにとな。むろんわしはその効果を過大に計算はして居らぬ。しかし、この密使を受取った者は必ず心になにほどかの動揺はあった筈じゃ」

「上様は、その他にも、強いお味方をお持ちでござりまする」

京都生れの卜斎は、自分の京へのあこがれを勝頼に託している。したがって、この度の出陣にひそかに賛意を抱く一人であった。

「おお、それも手違いなく運んでいるわ。本願寺と叡山、園城寺みな、われ等の西上を待つ、とある」

「公方さまからは、わざわざ智光院頼慶どのを、上杉家へ使者につかわされたそうにござりますな」

「そうじゃ」と、勝頼は大きくうなずいて、

「これはわしから頼んでやった。上杉と本願寺とわしの三者が結んであったら、織田は一も二もあるまいとのう」

「でも、上杉方への備えは……」

「それもぬかるものか。加賀越中で一向宗の徒がわれらと結ばぬ限り、上杉の軍勢は一兵も通さぬと固い誓書が参って居る。それに……」

と、言って眼を細めて、

「岡崎には、苦肉の策での、直ちに入城出来る手筈がついている。ハハ……はじめは長篠攻めのつもりが、お父上の遺志を奉ずる天下分け目の戦になったわ」

勝頼は快よさそうに笑ってからふっとわが居間の方を見やって眉をひそめた。

自分の留守中に、重臣宿将、そろって次の間へやって来ているのが、庭先から見えたのだ。

## 二

「揃って何事じゃ！」

勝頼はわざと声を暴くして、庭先からずかずかと高殿への階梯をのぼっていった。

むろん来意はわかっていた。今になってまだこの出陣をとどめようとする。それが血気の勝頼にはたまらなく不快であった。

「すでに軍議は決定した筈、いまさら臆病風に誘われたのではあるまいの」

そういうと勝頼は、叔父の逍遙軒から、山県三郎兵衛、馬場美濃守、真田源太左衛門、内藤修理と睨むように見ていった。長坂釣閑、小山田兵衛まで、後列にひっそりと坐っている。

「三郎兵衛、なぜ黙っているのだ。すでに方々の先手衆へ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はそれぞれ使者を出してある。本隊が遅れては相済むまい」
「仰せの通りでござりまするが」
と、源太左衛門が口を開いた。
「徳川どの、岡崎の城にあった九八郎が父奥平貞能に、小栗大六を附して岐阜に援兵を乞わして居る由にござりまするが」
「分っているわ。信長はむろん兵を三河に割こう。割かねば、美濃に攻入ってからの重荷になる。あとの荷を先に扱うまでとは思わぬか」
「恐れながら」と、三郎兵衛が小兵の膝をぐっと立ててみんなの前にすすみ出た。
「殿には鉄砲の威力をどのように考えさせられまするや、それを伺いおきたく存じまする」
「鉄砲が、敵に比べて僅少すぎると申すのか」
「信長どのは、鋭意それを取揃え中と、忍びの者からの知らせにござりまする」
「ハハ……」と、勝頼は笑った。
「三郎兵衛、鉄砲と申すはな、火縄、玉ごめと、手数のかかる武器じゃ。雨中では役に立たず、玉薬を合せている間に、躍りかかって蹴散らしたら大事あるまい。いや、わかった。よく心しよう。敵に鉄砲の備えがあると見た時は、雨を待って襲うとしよう。それでよいであろう」
「申上げまする」と、こんどは長坂釣閑だった。
釣閑は内心は主戦派だった。それが神妙な顔でみんなのうしろに附いて来ているのが勝頼にはいぶかしかった。
「われ等、歯に衣をきせぬがご先代さま時代よりの慣わしゆえ、まっすぐに申上げまする」
「おお、申してみよ」
「過ぎる年、高天神城を陥れ、この甲府城に凱旋して大広間で戦勝祝いの宴を張りました時……」
「その時になんとしたのだ」
「高坂弾正どの、盃をあげてそれがしを顧み、ハラハラと落涙なされました」
「なんで弾正は泣いたのじゃ」
「これは武田家滅亡の盃、悲しいことと呟かれて」
「なにッ」
勝頼の眼がかっと一度に燃え立った。
「高天神城は、お父上も幾度か攻めながらついに落せぬ城であった。それを予の代になって踏み潰した。それが滅亡のきざしというのか」
「恐れながら仰せの通りにござりまする。お父上さまも落せなかった城を落したが慢心のもとと……その後、高坂、内藤の両人、あれこれと上様に諫言申上げたことゆえ、あとは申上げませぬ。ただそのような空気が家中にあるこ

と、しかとお心にとどめ置き下されまするよう」
釣閑はやはり主戦派だった。彼はこういうことで、逆に勝頼を煽るつもりに違いなかった。

## 三

勝頼はしばらく息をつめて釣閑を睨んでいた。父すら落せなかった高天神の城を落したということは、父の死後、勝頼のただ一つの誇りであった。
それを武田家滅亡の先ぶれとは何という底深い父への思慕であろうか。しかもその思慕はつねに自分への軽侮、不信を伴っているのである。釣閑はそれを心に刻んでおけと言う。わざわざ刻めと言われるまでもなく、勝頼にとってこれほど心外なことはなかった。
「そうか……」
と、暫くして勝頼は、怒りをおさえて吐息した。
「それもこれも、わが家を想い、わが身を案じてのことゆえ予はとがめぬ」
釣閑はそういう勝頼の心のうちを、細かく計算しきった表情で、
「要するにこの派の人々は……」
と、言葉をつづけた。
「織田、徳川と和議を結んで、ご当家は、東へ翼をのばされるがよいと考えているのでございまする。もっと細かく申せばこの際、信長公の御子、御坊丸さまに東美濃を与え、家康どの異父弟、久松源之助どのに、駿河のうち城東郡を与えて、これに上様の妹姫を娶合せられ、逆に小田原を攻めらるるが上策と信じて居るのでございまする」
「釣閑、もう申すな。小田原とてわが妻の実家ぞ」
「それは存じて居りまする。それゆえ今度の西上は、それ等の異見を抱く方々をよく納得させねば士気にかかわる一大事と……」
一座はシーンとなった。
勝頼が手にした白扇でぴしりと脇息をたたいて釣閑の口を封じたからであった。
「相分った！　よく申した」
蒼白な額に、血がのぼって勝頼の頬は湯上りのように赤らんだ。
「卜斎！」
勝頼は入側まで来て皆のうしろに坐っていた板坂卜斎をほとばしるような声で呼んだ。
「小納戸の者に命じて、宝蔵から諏訪法性の甲冑と家伝の旗をこれへ持たせッ」
卜斎がはッと答えて立とうとすると、
「上様！」三郎兵衛が一膝すすめて、

「待て卜斎」と、卜斎をとめた。
「なきお父様さえ、うかとは手をふれさせなんだご重代の甲冑を……」
「申すなッ、卜斎、早くこれへ持参させよ」
「はッ」
卜斎はふたたび立ち、一座は凍てついたように、きびしい沈黙におちていった。
いかなる時にも、この家宝をかざして出で立つ戦には異議をはさまず生命を落せと言い伝えられている品々だった。
それをここへ運んで来いとは、もはや誰も何も言ってはならないということだった。
一座ははじめのきびしさからだんだん低くうなだれだした。長坂釣閑だけは、そうしてうなだれてゆく人々を意地わるい眼でみつめてゆく。
「みなの心はよう分る……」
湯上りのような頬をして勝頼は頭を下げた。
「この勝頼の生涯に二度ない好機、父の遺志を継がせてくれ、三河勢など……長篠城など……ひと揉みに揉みつぶしてみせてやる。小異を捨てて微力な勝頼を助けてくれ」
一座のすみで、洟をすする音がした。そっと手の甲で涙をぬぐっているのは、信玄とは瓜二つの弟、逍遙軒であった。

## 四

武田勢が勝頼にひきいられて甲府（古府）のつつじが崎の城を出発したのは桃も桜も、まだ蕾の固い二月の末であった。
直ちに東三河を衝くとふれさせ、その方面へ以前の長篠城主菅沼一族の兵を移動させながら、勝頼はそれより西の武節（ぶせつ）街道をめざしてすすんだ。
勝頼の生涯に二度ない好機といわれ、新羅三郎以来の家宝を持出されては、この戦をあやぶむ老臣たちも口を閉じてこれに従うよりほかなかった。
すでにこの頃には、勝頼をこの街道から一挙に岡崎城へ迎え入れようとする大賀彌四郎はこの世の人ではなかったのだが、勝頼のもとへはその知らせがとどいていなかった。
彌四郎の一味のうち、ただ一人、天龍川を泳ぎわたって武田領へのがれていった小谷甚左衛門が甲府に潜入していった時には、勝頼は城を出ていっていたからだった。
駿河、遠江への道とちがって、木曾山脈を右に見て、山また山の間をすすむこの行軍は、おびただしい小荷駄をしたがえているだけに、意外に手間どった。勝頼が蛇峠山を越え、波合（なみあい）から根羽（ねばね）にたどりついたときには、谷から峰は

こぼれるように山桜が咲いていた。
「武節に入ると吉報があろう」
和合川の渓谷で、乗馬に飼料をやりながら勝頼はふと洩した。
敵の出方いかんにかかわらず、家中の空気が勝頼を、すでに一歩もひかれぬものにしてしまっている。
それだけに家康の虚をついた岡崎城へ一気に入城してゆく夢想は勝頼を楽しませた。
武節の近くの稲橋に着いた日は小雨であった。
春の匂いを濃くかくした、絹糸のような雨脚で、戦旅の感傷と天地のやわらぎがふとふれあいそうな日であった。
「申し上げます」
その小雨の中を馬を停め、尖兵からの注進を待っているときに、旗本の大将小山田備中守昌行が、小首かしげて勝頼のそばへやって来た。
「何だ。うかぬ顔で、武節から何か使者でもあったのか」
「それが……」
といって備中は勝頼の床几の前へ片膝つきながら、また首を傾げていった。
「さきほど、それがしが配下の者、挙動の怪しい旅人を捕えて詮議致しましたところ、甚だおかしなことを申しまする」
「おかしなこととは……何かあったのか武節の城に」
「いいえ、岡崎にでござりまする。岡崎郊外で大賀彌四郎と申す者、生きうめにされ、首をのこぎりで引き千切られた。それを見て参ったとその者は申しまする」
「なに大賀彌四郎が!?」
「はい。謀叛の罪と、はっきり高札に認めてあった。間違いないといいはります」
「その者をこれへ呼べ！　敵の回し者に違いない。たわけたことを！」
勝頼が急き込むと、備中はまだ不審の捨てきれない表情ですぐに幔幕の外へ出ていった。
「これ、その者をこれへ曳け」
少し離れた杉の根方に一団になって雨を避けている人々に声をかけると、
「はっ」と答えて縄尻とった若侍が、その一団をはなれて来た。

## 五

引き立てられて来た男は、凡そ間諜などのつとまりそうにもない、六十を超えた、いかにも愚かしげに小肥りの老爺だった。
「その方は何の所用で岡崎からこっちへ参ったのだ」

「はい。私はこの先の根羽に娘と孫と一緒に住んで居ります。はい、棉の種を商いに出て、売りつくしましたゆえ、ここまで戻って来ましたので」
「それが、なんでうろうろと、あちこちの陣をのぞき歩いたのだ」
「いいえ、のぞくなどと飛んでもないこと――」
老人は真剣な怖(おび)えをあらわに見せて、
「私が、ここから通ろうとすれば、おん大将がた。あっちから通ろうとすれば、またおん大将がた……それで腰がぬけかけて、木の根にすくんでいたのでございまする」
備中はちらりと勝頼を見て、指揮を待つ顔になった。
「おん大将さま、あのう、根羽はもしや戦で、焼かれたのでございますまいか」
「その方は、予が誰か知っているか」
勝頼はじっと老爺を見つめたままで口をひらいた。
「まことに申訳ございません。幔(まく)のご紋で武田さま方とは存じまするが、御大将さまのお名前などは……」
「知らぬと、ここは通さぬと申したら何とするぞ」
「お慈悲でございまする。はい、婿はこの前の戦の時に流れ矢に当って死にました。二人の孫と娘と私……娘はそれからずっと病身ではい、私が働かねば孫どもが……」
「爺！」と、勝頼はようやく相手が土民とわかった様子で、
「そなた岡崎の町外れで何を見たと？　のこぎり引きの罪人を見て来たと」
「は……はい。それはそれはむごたらしいものを見て、それ以来、食事のたびに吐気をもよおして困っています」
「その者の様子、見たままそこで申してみよ」
「はい。顔はすっかり薄紫にはれあがり、通行人に蹴られたり踏まれたり致しますので、額の皮はむけ、唇はざくろのように割れて居りました」
「それで……」
「それが大声で、助けてくれ！　と、私たちに頼むのでございます。この穴から引き出してくれたら、あとでどのようなお礼もする。おれは三河奥郡(おくごおり)の……何でも代官さまだったとか。はい。みんなゲラゲラ笑いました。そんな偉い侍が、あかごのような声を出してワーワー泣くものかと……」
「もうよい。してその者の名は？」
「はい大賀彌四郎とかいう悪人だと立礼にございました」
勝頼はそっと額の汗をふいた。
「備中、すぐに人を出して真偽をたしかめさせよ。この者は、その知らせが参るまで、武節の城にとどめおけ」
「立てッ！」と老人は引立てられた。

「おん大将さま、私は、決して……」
勝頼はその老人が連れ去られると、いきなり床几を立って幔幕の外へ出ていった。
雨はいぜんとして木々の若芽をほぐそうとして柔々降っている。峰から峰のはざま、橋から渓流の行方に、あたためられた乳のような霧があった。
「そうか大賀彌四郎はしくじったか……」
勝頼はぐっと胸をそらして、傷ついた鷹のようにあたりを睨んで歩きまわった。

## 六

戦魔は勝頼に苛酷であった。
大賀彌四郎の刑死——という一つの蹉跌は甲州軍にとって決して小さな出来事ではない。
それだけに、ここで一歩冷静に作戦を練り直すべきであったが、事態は逆に煽っていた。
勝頼は内心の狼狽をつつむため必要以上に感情的になっていた。
「——彌四郎の死などは問題ではない」と彼は幕下の諸将にいった。
「——岡崎が先か、長篠が先か、踏みつぶす戦の順序が違ったまでだ」
そういうと、すぐに武節の小城へ入って軍評定に移っていった。
彌四郎の内応が露見している以上、岡崎城の戦備は完全と見なければならない。したがって岡崎に攻めかかり、ここでもし日時を費しては、西からの織田の援軍と浜松吉田の東の兵に挟撃されよう。
「岡崎は問題にすな。ここで鉾を転じて長篠城をふみつぶせ」
そのためには、ここまで出て来た事も無駄ではない。彼等は本隊が岡崎を衝くものと信じて、長篠の兵を割いている——と、強弁する勝頼だった。
こうして長篠城の図面はついに諸将の前にひろげられていった。
この豊川の上流、大野川と滝沢川の合流点に築かれた嶮岨をほこる山城は、二本の川の合した正面の絶壁に野牛門があり、それに細く長い橋がかかっていた。
そこを渡合といい、その西北に本丸があり、本丸の向って左手に弾正曲輪、うしろに帯曲輪、そのまたうしろに巴曲輪、瓢曲輪とつづいている。
家老屋敷は弾正曲輪の外にあり、大手は西北、搦手は東北にあった。
したがって、これを一挙に揉みつぶすには、南は正面の



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com